

## 個別・小集団による性教育の実践的研究 —小学校におけるカフェテリア方式性教育5年間の実践を通して—

江 崙 和 子

九州女子短期大学 子ども健康学科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2011年11月1日受付、2011年12月5日受理)

### 要 旨

カフェテリア方式性教育は2004年に開発(2004松浦)された個別・小集団による性教育である。本研究はカフェテリア方式性教育の実践の可能性を探ることを目的に行った。研究方法は、カフェテリア方式性教育をK市内S小学校において2004年度から5年間実践した。

その結果、対象学年は、2004年度は4年生～6年生、2005年度～2008年度は5年生と6年生であった。対象児童数は、2004年度は29名、2005年度は21名、2006年度は18名、2007年度は23名、2008年度は28名であった。授業回数は、2004年度は2回、2005年度～2007年度は3回、2008年度は2回であった。テーマ数は、2004年度は1回平均7テーマ、2005年度は1回平均6テーマ、2006年度は1回平均7.3テーマ、2007年度は1回平均10.7テーマ、2008年度は1回平均11テーマ、であった。教育内容(テーマ)では以下のような展開が見られた。2004年度～2006年度は概ね、「生・死等」「親」「二次性徴」「性以外」「小中連携」の5カテゴリー分類できた。2007年度は概ね、「二次性徴」「他者理解・コミュニケーション」「自己理解・自尊心」「性情報」「性被害」「性以外」「小中連携」の7カテゴリーに分類できた。2008年度は概ね「二次性徴」「男女交際」「性被害」「性情報」「自己理解・コミュニケーション」「自己理解・自尊心」「他者理解・コミュニケーション」「生活習慣」「将来展望」「小中連携」の10カテゴリーに分類できた。

教師のメッセージを、経年的にみていくと、2、3年目の実践から教師の指導意図を明確にした主体的な関わりがみられ、4年目には教師が子どもたちの緊急及び今日的課題の対応に即した実践が見られた。5年目には、クラス全体及び個々の児童の課題や担任教師としてのメッセージ(願いや希望)をアンケート等で明確にしながら実践を進めた。そして、子どもたちのふりかえりシートや事例からカフェテリア方式性教育がS小学校の性教育の目的達成のために有効であることが示唆された。

### 1. はじめに

文部科学省<sup>1)</sup>は、性教育の目的を「児童生徒の人格の完成と豊かな人間形成を究極の目的」とし、学校における性教育の内容を提示している。さらに性教育実施上の留意点として、「保

護者や教職員が持つ性に対する意識や性教育に関する理解及び認識は多様であり、教育の内容や方法も時代の変化や科学の進歩発達によって変化することもある。」とした上で、6項目提示している。今日、学校現場では、この内容・目的や留意点を踏まえ、様々な実践がなされている。

本研究は、6項目の留意点の中から、特に以下に引用する3点に着目した。「児童生徒等の身体的・精神的発達や性的成熟の個人差が大きく、情報化時代といわれる現在、性に関する情報の質や量にも差異がある。このため、これらの個人差異を配慮し、児童生徒等の性教育に対する受容（レディネス）に応じた内容や方法を選択することとともに<以下略>」「<前文略>集団学習においては学習の個別化が必要であるが、それでもすべての児童生徒等を満足させることは困難である。したがって、性教育の具体的な実施に当たっては、集団指導と個別指導とによって相互に補完することが必要である。」「教育のすべての場について言えることであるが、特に性教育においては教師と児童生徒等及び保護者との間の信頼関係が不可欠である。もし、性教育の授業を適切に行うことができれば、教師と児童生徒等との信頼関係はより深まることになるであろう。」

従来、前述のように、このような留意点を念頭に置きながら性教育は実施されてきたが、集団（学級や学年）指導という形態や、対象学年の担任や養護教諭が実施するという方法からなかなか抜けきれず、特に、子どもたちの発達段階や個人差異に応じた具体的な指導方法については、模索している状況があると思われる。

今回、個別・小集団による性教育として開発（2004松浦）された「カフェテリア方式性教育」に着目し、小学校に導入し実践した。その成果と課題を検討することにより、新しい時代の性教育の在り方に繋げていきたい。

## 2. 研究目的

小学校における、カフェテリア方式性教育の実践の可能性を探る。

## 3. 研究方法

カフェテリア方式性教育をK市内S小学校において、2004年度～2008年度の5年間導入し、実践した。筆者は、2004～2005年度にS小学校の保健主事兼務の養護教諭として本研究を行った。2006～2008年度は、外部の研究者として、S小学校の保健主事・養護教諭と連携しながら本研究に携わった。

カフェテリア方式性教育は2004年に開発（2004松浦）された個別・小集団による性教育である。そして、以下の条件を満たすように考慮されている。<sup>2)</sup>

- 1) 学習指導要領等、学校における教育範囲を逸脱しないこと
- 2) 保護者の人権（世界人権宣言26条を参照）を尊重すること

- a. 事前に個別に了解を得る。得られない場合は、別の健康教育メニューを用意。
- 3) クラス単位の集団性教育と個別指導の中間形態であること
  - a. 最低でもクラスの枠を取り払う。学年の枠も可能。
- 4) 多数の教員がかかわること
  - a. 子どもたちへのメッセージ環境を構築するために（低リスク化に寄与）
  - b. 様々な性に関する態度や意識を伝えるために（低リスク化に寄与）
- 5) 多くのカフェ（テーマ=教育内容）を掲げること
  - a. 直接的に性にかかわることから、間接的に性にかかわることまでを網羅する
- 6) 多様性へ配慮（子どもたちのニーズ、保護者のニーズ、教員のニーズに対応）すること
  - a. 年に3回のセットが望ましい

条件6) の子どもたちの多様性へ配慮（子どもたちのニーズ、保護者のニーズ、教員のニーズに対応）する方法として、教育内容を子どもの希望、保護者の意向、教師の教育的視点・配慮の3つの観点で構成した。つまり、カフェテリアというのは客が自分で料理を選び、食卓に運んで食べる形式の飲食店のことで、カフェテリア方式性教育とは、子ども・保護者・教師が学びたいこと（学ばせたいこと）を選んで学ぶというものである。

具体的には、いくつかのテーマと担当者（教師）を予め設定し、1回の授業は子どもたちが学びたいテーマと担当者を選び、授業を受ける。もう1回の授業は保護者が自分の子どもに学ばせたいテーマと担当者を選び、子どもがそのテーマと担当者の授業を受ける。もう1回の授業は担任教師が担任する子どもひとり一人について学ばせたいテーマと担当者を選び、子どもがそのテーマと担当者の授業を受けるというものである。

本研究は、カフェテリア方式性教育の6項目の条件を基本としながら、「可能性を探る」という研究目的から、学校現場の実態に応じた柔軟な試行とした。

そして、実践に当たり、S小学校では性教育の目的を以下の3点とした。この目的は、カフェテリア方式性教育を実践した5年間、同じ目標であった。

- 1) 心身の発育による性に関する個人差（興味・関心も含める）を尊重する。
- 2) 教師も自分が得意とする「性教育に関連する分野」により、その根底にあるメッセージを伝える。それは生命の大切さ、二次性徴、心の変化、といったような従来の主題のように、端的に表されるメッセージとともに（を通して）、教師も“性を切り離せない”人間として子どもたちに伝えたいもの、といったような本質的な奥深い何かが伝わればよい。
- 3) 性に関するネットワークづくりとして、将来子どもたちが相談できるリソース（資源）やライン、雰囲気を増やし、高める。また、個別指導・継続指導への布石となるようにする。

## 4. 研究結果

### (1) 概要

#### ①対象学年と対象児童数

2004年度は4年生～6年生、2005年度～2008年度は5年生と6年生であった。対象児童数は、2004年度は29名、2006年度は18名、2007年度は23名、2008年度は28名であった。年度別学年別性別対象児童数一覧表を表1に示す。

表1 年度別学年別性別対象児童数一覧表(人)

年度	学年	男子	女子	計	合計
2004	4年生	4	7	11	29
	5年生	6	4	10	
	6年生	4	4	8	
2005	5年生	4	7	11	21
	6年生	6	4	10	
2006	5年生	6	1	7	18
	6年生	4	7	11	
2007	5年生	9	7	16	23
	6年生	6	1	7	
2008	5年生	9	4	13	28
	6年生	8	7	15	

#### ②授業回数

2004年度は2回、2005年度～2007年度は3回、2008年度は2回で、5年間で13回であった。

#### ③テーマ選択主体者

2004年度は児童・保護者、2005年度～2007年度は児童・保護者・教師、2008年度は児童・教師、であった。

#### ④テーマ数

2004年度は1回平均7テーマ、2005年度は1回平均6テーマ、2006年度は1回平均7.3テーマ、2007年度は1回平均10.7テーマ、2008年度は1回平均11テーマであった。

#### ⑤個別化

1テーマ当たりの対象児童が1名であったテーマ数、つまり教師と1対1の授業を行ったテーマ数は、2004年度は1回平均1.5テーマ、2005年度は1回平均0.7テーマ、2006年度は1回平均4.7テーマ、2007年度は1回平均6.3テーマ、2008年度は1回平均3.5テーマ、であった。年度別授業回数、テーマ選択主体者、テーマ数等の一覧表を表2に示す。

表2「年度別授業回数、テーマ選択主体者、テーマ数等一覧表」

年度	授業回数	テーマ選択主体者		テーマ数	1テーマ当たりの平均児童数	対象児童が1名だったテーマ数
		1回目	2回目			
2004	2	1回目	児童	7	4.1	1
		2回目	保護者	7	4.1	2
2005	3	1回目	児童	7	3.0	1
		2回目	保護者	6	3.5	1
		3回目	教師	5	4.2	0
2006	3	1回目	保護者	6	3.0	2
		2回目	児童	8	2.3	5
		3回目	教師	8	2.3	7
2007	3	1回目	教師	11	2.1	7
		2回目	保護者	12	1.9	8
		3回目	児童	9	2.6	4
2008	2	1回目	教師	13	2.2	5
		2回目	児童	9	3.1	2

#### ⑥保護者との連携

カフェテリア方式性教育は、条件に「2）保護者の人権（世界人権宣言26条を参照）を尊重すること a. 事前に個別に了解を得る。得られない場合は、別の健康教育メニューを用意。」とある。S小学校における実践では、2004年度に2回の授業を実施したが、初年度であるため、特に保護者の了解を得ることに注力した。実施前に「保健だより」で紙面によるお知らせを行った。これは日頃の地域連携がなされているからこそその判断である。また、1回目の授業終了後には「保護者個人懇談会」の場を活用し、一人ひとりの保護者にカフェテリア方式性教育の説明と2回目の「保護者がテーマを選択する授業」に向けてのテーマ選択を依頼した。また、「学校保健委員会」の場でもカフェテリア方式性教育の実施について報告した。前述の「保護者個人懇談会」で、「カフェテリア方式による性教育に対する意見、感想、希望」を記述式のアンケートで求めた。結果の一部を以下に示す。

- ア. これからも引き続き行ってください。
- イ. 個人のレベルに合った学習方法なので、無理がなく良いとおもいます。今後もよろしくお願いします。
- ウ. 恋愛とか男女交際などは時期がくれば自然にわかると思うので体の変化について教えてほしい。
- エ. むやみな性行為で病気になったりする事とか、その病気について学習してほしい。
- オ. 男の子の体の成長に関して親自身が（特に女親）いろいろ知りたいので。子どもに伝える前に保護者に性教育を教えてほしい。

また、2004年度の2回目の授業は全校参観日とし、カフェテリア方式性教育を公開した。

このように初年度である2004年度に保護者との連携強化を図ることで、2005年度以降は「保健だより」等の紙面によるお知らせで推進していくことができた。

## (2) 教育内容 (テーマ)

### ①教育内容 (テーマ) と授業担当者の決定

教育内容 (テーマ) (以後、「テーマ」と記述する。) の決定を以下のように行った。まず、カフェテリア方式性教育の条件「4」多数の教員がかかわること」を満たすために、授業日時の設定と同時に担当可能な教員を選んだ。(以後、「担当者」と記述する。) この担当者の選定は、5年間で総授業回数は13回であったが、1回毎に行った。実際に本研究では、当該学級 (学年) の担任、他学級 (学年) の担任、特別支援学級の担任、養護教諭、教務主任、教頭、外部講師等が授業を行った。外部講師は、S小学校の子どもたちが進学する中学校の教師であった。これは、S小学校の6年生の子どもたちが中学校進学に当たり、様々な不安を抱いているという学校実態を反映させたためである。中学校教師は2004年度の第1回目、2005年度の第3回目、2006年度の第3回目、計3回に招聘した。

担当者数とテーマ数の関連は、担当者1人につき、1テーマにしたため、毎回、担当者を決めて、担当者の人数に合わせてテーマ数を決めていった。

具体的なテーマの決め方は、2004年度1回目の授業のみ、具体的なテーマ決定前に子どもたちの希望を取り入れるための、アンケート調査を行った。この、2004年度1回目の授業担当者は7名であった。まず、保健主事 (養護教諭) が参考資料<sup>1)</sup> から21の「性教育に関するテーマ」を決め、子どもたちに提示し、「学びたいこと、知りたいこと」を記述式による複数回答で求めた。結果を表3に示す。

表3 「2004年度 第1回児童希望調査結果」 複数回答 n=28

項 目	人	%
きれいなからだ	2	7.1
知らない人から自分の体を守る方法	4	14.3
生命誕生	13	46.4
大切ないのち	15	53.6
二次性徴	3	10.7
月経のしくみ	3	10.7
射精のしくみ	6	21.4
男子のからだと男性のからだ	6	21.4
女子のからだと女性のからだ	4	14.3
父親ってこんな気分だよ	6	21.4
母親ってこんな気分だよ	6	21.4
大人になるということ	8	28.6
子どもを育てるということ	7	25.0
家庭ってなに?	4	14.3
結婚ってなに?	3	10.7
性情報があふれている	1	3.6
だれかをすきになるってどんなこと?	6	21.4
男女の協力	4	14.3
男の子への興味	2	7.1
女の子への興味	0	0
男女交際ってどんなこと?	9	32.1

その結果を基に6つのテーマを決めた。そして、カフェテリア方式性教育の条件の一つに「5) 多くのカフェ (テーマ=教育内容) を掲げること」があるが、これは子どもたちの性への興味関心も含めた個人差異を尊重するためである。この条件を満たすために、具体的には、直接的に“性”に関わらない内容のテーマを1つ設定した。(2004年度は、「スポーツ」)このようにして7つのテーマを決めた。そして、担当者とのテーマの授業が実施可能か話し合いながら決めた。

2005年度と2006年度は、性教育の実施日時が決まり、その日に授業が可能な担当者を決めた後で、担当者がテーマを決めた。その際「今、教師として、子どもたちに伝えたいことをテーマ(教育内容)にする。」ことを共通理解した。2007年度も、「今、教師として、子どもたちに伝えたいことをテーマ(教育内容)にする。」ことを共通理解にしながらも、「他者理解・コミュニケーション」「性情報」「性被害」等、教師が緊急及び今日的課題と考える内容へ傾倒していった。そして、2008年度は学級(学年)の課題及び個別の課題(教師のメッセージ)を担任へのアンケート等でより明確にしてから、テーマを設定した。

つまり、2回目～13回目の授業では子どもたちに事前のアンケートはせずに、1回目のテーマを基本にし、担当者の希望(子どもたちの将来を見据え、あるいは子どもたちの課題を踏まえ、今子どもたちに伝えたいこと等)に則したテーマを決定していった。

## ②具体的な教育(テーマ)内容とテーマの選択

テーマを年度別に概観し、分類した。2004年度～2006年度は概ね、「生・死等」「親」「二次性徴」「性以外」「小中連携」の5カテゴリーに分類できた。2007年度は概ね、「二次性徴」「他者理解・コミュニケーション」「自己理解・自尊心」「性情報」「性被害」「性以外」「小中連携」の7カテゴリーに分類できた。「2004年度～2006年度カフェテリア方式性教育テーマ等一覧表」を表4に示す。





2008年度は概ね「二次性徴」「男女交際」「性被害」「性情報」「自己理解・コミュニケーション」「自己理解・自尊心」「他者理解・コミュニケーション」「生活習慣」「将来展望」「小中連携」の10カテゴリーに分類できた。

次に、テーマの選択傾向をみるために、2004年度～2006年度の5・6年生のテーマ選択に、子どもたちの選択と保護者の選択結果に違いがあるかどうか集計した。2004年度～2006年度のテーマは、概ね「生・死等」「親」「二次性徴」「性以外」「小中連携」の5カテゴリーに分類できたが、「小中連携」以外の4カテゴリーで、テーマ選択の傾向をみた。2004年度～2006年度 児童・保護者のテーマ選択結果を男女別と年度別に表5、表6に示す。

表5 2004年度～2006年度 男女別児童・保護者のテーマ選択結果—人数(%)

選択者 テーマ 性別 カテゴリー	児童			保護者		
	男子	女子	計	男子の 保護者	女子の 保護者	計
「生・死等」	3	7	10 (17.5)	12	11	23 (40.4)
「二次性徴」	12	10	22 (38.6)	9	9	18 (31.5)
「親」	6	3	9 (15.8)	4	5	9 (15.8)
「性以外」	9	7	16 (28.1)	5	2	7 (12.5)

表6 2004年度～2006年度 年度別児童・保護者のテーマ選択結果—人数(%)

選択者 テーマ 年度 カテゴリー	児童				保護者			
	2004	2005	2006	計	2004	2005	2006	計
「生・死等」	3	5	2	10 (17.5)	7	9	7	23 (40.4)
「二次性徴」	11	4	7	22 (38.6)	6	6	6	18 (31.5)
「親」	3	5	1	9 (15.8)	4	4	1	9 (15.8)
「性以外」	1	7	8	16 (28.1)	1	2	4	7 (12.5)

また、教師（担任）が自分のクラスひとり一人の子どもたちについて、どういうテーマで学ばせたいかという教師の選択についての結果は以下のものであった。2004年度は2回の授業のため教師の選択は実施していない。2005年度、2006年度共に、6年生担任は全員に中学校教師の授業を受けさせたいという選択を行った。2005年度の5年生については消極的な選択になった。しかし、2006年度の5年生には、教師はひとり一人の子どもたちに教育的視点・配慮による選択を行った結果、全員個別指導となった。2007年度は1回目に教師の選択を行い、メッセージ性をより明確にした。

### (3) 性教育に対する受容（レディネス）

本研究では、1年目の研究対象児童数29名のうち28名（1名欠席）を対象に子どもたちの準備性を見るため、アンケート調査を行った。第1回目の授業前にカフェテリア方式性教育についてのオリエンテーションを行い、提示した7つのテーマから自分が受けてみたいテーマを記述式で選択させ、「今日の話を書きいて思ったことを書きましょう。」という質問の回答を求めた。その結果、約8割（78.6%）の子どもたちが興味関心、及び授業に前向きな姿勢や心構えを示した。表7に示す。

表7 2004年度 児童の準備性アンケート結果 n=28

内容	人数 (%)	具体的な記述
興味・関心	19 (67.9)	たのしそう、早くやりたいです、ふだん学べないことが学べるのでうれしいです、男女交際って聞いてみたい など
姿勢・心構え	3 (10.7)	1人になってもしんげんに聞く、ちゃんと話を聞く など
感想・理解	3 (10.7)	話がよくわかった、きんちょうした、性教育にはいろいろあるんだなとわかった
理由	1 (3.6)	わからなかったから選んだ
不安	1 (3.6)	1人やったらどうしようと思った
無記入	1 (3.6)	

### (4) 評価

#### ① レンガ式評価モデル

2004年度、2005年度の実践過程において、子どもの変容を見ていく、つまり縦断的評価のための記録方法としてのレンガ式評価モデルを開発し、2006年度に試行した。レンガ式評価モデルを図1に示す。

平成18年度 カフェテリア方式性教育のレンガ式評価表		京都市立〇〇小学校
年 児童名		
E 最終コメント (担任)		
③		ウ
3回目		D 3回目終了直後の追加コメント (担任)
②		イ
2回目		C 2回目終了後3回目までの追加コメント (担任)
①		ア
1回目 平成 年 月 日 ( ) 校時		B 1回目終了後2回目までの追加コメント (担任)
テーマ「 」担当 場所		A 性教育実施前のコメント (担任)
担当者 児童		A

図1 レンガ式評価モデル

様式はB4九つ切画用紙を縦に使用し、1枚に2006年度の3回の授業内容や子どもたちの感想等の全記録が残せるようにした。記入の流れは以下のとおりである。

はじめに、担任が一人ひとりの子どもについて性教育実施前のコメントを記入する。(A)内容は「気になる点」「その子をどう見ていくかという目線」などである。1回目の授業が終了したら、担当者のコメント(①～③)と子どもたちのふりかえり(ア～ウ)をそれぞれの記入欄に記入する。これは、子どもたちがワークシートに記入したものを教師が転記する。担任はそれを見て、次の授業までにその子どもへのコメントを記入する。(B～D)内容は子どもたちの学校での様子や保護者からの情報、担任の思いなどである。特になければ記入しなくてもよいことにする。年度末に担任が最終コメント(E)を記入する。内容は、子どもたちの「行動面、態度面、精神面などの変容」「今後、期待できる点、気になる点」「保護者

の思い、喜び、心配、不安」などである。保管は養護教諭が行った。

## ②KJ法による『「レング式評価モデル」に記述された子どもたちのふりかえり』分析

2006年度の3回の授業を評価するために、レング式評価モデルに記録された子どもたちの「感想」をKJ法で分析した。分析対象は、「性以外」、「小中連携」のテーマの記述は省き、「生・死等」「親」「二次性徴」のテーマの記述のみ対象とした。その結果、分析対象の延べ人数は29名になった。29名の全記述を意味のある文節に区切り、一つの文節を一枚のラベルに転記した。ラベルは全部で56枚になった。56枚のラベルをKJ法の手順に則って分析を行った。56枚のラベルは多段ピックアップは行わず、3段階の表札をつけ、最終的に図解化した。分析は、KJ法本部川喜田研究所の川喜田晶子主任研究員をスーパーヴァイザーとし、個人作業で行った。図解のタイトルは「カフェテリア方式性教育で子どもたちが学んだこと～風景の激変～」とした。4つの島の表札は以下の通りである。シンボルマークは子ども目線と教師の評価目線の2種類付けた。『』は子ども目線で、【】は教師の評価目線である。

◎自分の二次性徴、家族、障害、いじめについて学習を通してつながりや関わりに気づき、自他を大切にする慎みや配慮、温かい関わりについて考えた。

『<ひとり>では生きられない』【関係性を大切にする】

◎有限な生をどう生きるかに目ざめ、夢を持つこと、大人や親となる自覚を持つことを考えた。『いつか来る<死>』【抽象性を育てる】

◎教師や障害者の生（なま）の体験談、教師や年齢・価値観を超えた友達との直接的なふれ合いの重要性を認識し、生きる重みや喜びを感じとった。

『直に触れたい<他者>』【関係性を感じる】

◎二次性徴をめぐって科学的な仕組みや知識を学習することで、自分の身体への直接的な興味関心を示すなど、まなざしが変わった。

『気になる<からだ>』【身体性へのまなざしを持つ】

## ③アンケート調査

2008年度1回目の実践の評価として2項目のアンケート調査を行った。その結果、「今日の内容は、よくわかりましたか？」という質問の回答は、「よくわかった」が67.9%。「だいたいわかった」が17.9%、「あまりよくわからなかった」が7.1%、「無回答」が7.1%であった。また、「今日の内容は、心にのこりましたか？」という質問の回答は、「のこった」が67.9%、「少しのこった」が21.4%、「あまりのこらなかつた」が3.6%、「無回答」が7.1%であった。結果のグラフを図2及び図3に示す。

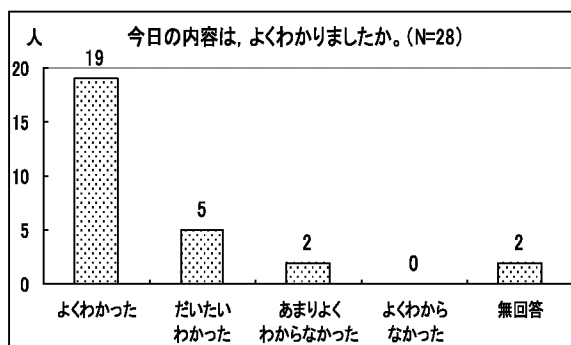


図2 授業後アンケート①

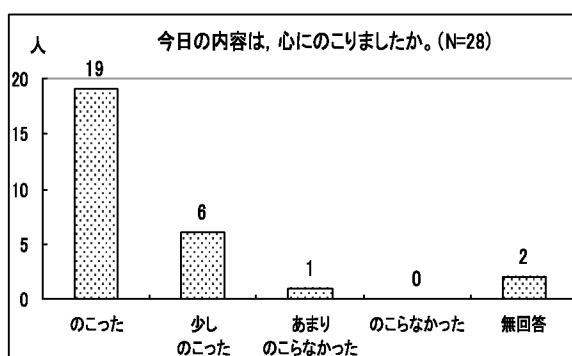


図3 授業後アンケート②

### (5) 事例

5年間の実践において、子どもたちの中で、特に変容が見られた2事例を報告する。なお、事例の記述内容については、骨子を変えない程度に変更してある。

#### ①高学年A児

##### 【性教育実施前の担任のコメント】

幼児期に母親を亡くしている。思春期をむかえるにあたって家族は心配している。

【本児が1回目を選択した学習テーマは「死ぬって？」のテーマであった。】

##### 【授業を担当した教師①の記録】

死のイメージ・いなくなる。・混乱する。・肉体はどうなるか。なぜ、人類として私達はいのか。・死んだらどうなるのか。話をよく聞き、よく理解した。自分の母親の死を受けとめ、自分はこれからたくさんの人に自分のことを知ってもらいたいという思いを持った。

##### 【A児の1回目の授業後のふりかえりより】

生きていること？なぜ死ぬの？から宇宙からの声を聞いていたら、私たちは生きているからこそ死ぬ。だからおそれることもない。死んだ人はいなくなるんじゃなくてその人といっしょにいた気持ちの中にならず〜といることなどがわかりました。私はたくさんの人と出会って

自分のことをたくさんしてもらいたいと思いました。

【保護者が2回目の授業で選択したテーマは「母親ってなに？」のテーマであった。】

【授業を担当した教師②の記録】 <略>

【A児の2回目の授業後のふりかえりより】

夏休みに「〇〇〇〇」の本をよんで、あるきっかけで死ぬ人は、命の大切さを教えるためにうまれてきたということがかいてありました。私のお母さんはそのことをするために産まれてきたのかなと思っていました。〇〇先生(教師②)の話はすごいおもしろかったです。

②高学年B児

学習に向かう姿勢、他者とのかかわり等課題面が多く、担任が最も気になる児童であった。しかし、カフェテリア方式性教育で教師と1対1で対話した体験がB児を変えるきっかけの一つになり、変容を見せた。B児はその体験を綴り、地域の小学校が集まった大会でS校を代表して発表した。

【B児の作文より】

ぼくは、〇年生の1年間、自分を変えようと努力し、少しずつ自分を変えてきました。<略> 自分を変えるきっかけの一つ目は、夏休みの部活動でした。 <略> 次に自分を変えるきっかけとなったのは運動会でのリレー種目でした。 <略> 最後に、自分を変えるきっかけとしての大きなできごとは、12月に行われたカフェテリア形式の学習でした。ぼくは、この学習で〇〇先生と1対1で「自分の大切にするもの」というテーマで話をしました。<略>

## 5. 考察

カフェテリア方式性教育を導入した1年目は、対象を4年生～6年生とした。これは、4年生の前期(4月～9月)に『体育科「G保健」(2)育ちゆく体とわたし』の授業を行い、体の発育・発達について理解させた後、後期(10月～3月)の性教育(保健指導)へ繋げることを目的としたためである。すなわち、集団指導と個別指導とによって相互に補完することをねらいとした。しかし、1年目の実践終了後、教師から「4年～6年の縦割りによる指導は基礎学力の差や発達段階を考えると難しい面があり、5、6年生対象が適当ではないか。」という課題が浮上した。従って、2年目～5年目の実践は、5・6年生を対象とした。その後、前述のような課題は浮上せず、集団指導と個別指導とによって相互に補完するというねらいも継続可能であった。小学校におけるカフェテリア方式性教育は5・6年生対象が適当と思われる。

子どもたちの準備性をみるアンケート結果では、67.8%が授業に興味関心を示し、10.7%が授業に前向きな姿勢や心構えを示した。これは、自分が受けたいテーマを選択した直後であるため、児童の興味関心や学習への前向きな姿勢・心構えが生じたと思われる。したがって、テーマを選択するという方法は子どもたちの準備性を高めるということに寄与すると思われる。実際に、担当者より、子どもたちのニーズによる学習テーマの設定と選択が児童の

学習意欲を喚起させたという報告があった。

教育内容（テーマ）選択について、子どもたちと保護者の傾向について、2004年度～2006年度の結果を見ると、5・6年生児童は「二次性徴」と「性以外」を選択する傾向があり、保護者は「生・死等」と「二次性徴」を選択する傾向があった。子どもたちが二次性徴という自分の身体におこる変化に不安や興味等を抱くのは当然であろう。保護者も子どもが異性であれば特に、学校性教育への期待は大きいだろう。二次性徴は個人差異や男女差異が大きい。従来、そういう個人差異の大きい子どもたちへの指導は主に養護教諭が、個別指導として授業時間以外に行っていたと思われる。しかし、カフェテリア方式性教育をS小学校のようにシステムとして組み込めば、個人差異に対応した性教育を全校体制で行うことができる。また、「二次性徴」以外に保護者は「生・死等」を、子どもたちは「性以外」を選択する傾向にあった。「生・死等」のカテゴリーのテーマというのは、具体的には「いのちのふしぎ」「私の生きる道」「死ぬって?」「生きること、死ぬこと」「相手の気持ちになって考えよう（いじめ）」「障害ってなあに?」である。保護者としては子どもたちに是非考えてほしい、学んでほしいテーマではあるが、子どもたちは「性以外」のカテゴリーを選ぶ傾向であった。具体的には「スポーツと健康」「スポーツが教えてくれたもの」「スポーツって?」「中学校での部活について」である。子どもたちの興味関心を尊重しながらも、保護者の意向を取り入れ、保護者との信頼関係を図ることは、学校の性教育には不可欠である。1回は保護者がテーマを選択するというカフェテリア方式性教育は保護者との信頼関係を築いていく上でも有効であると思われる。

2004年度～2006年度の実施年度によるテーマ選択の傾向を見ると、保護者は同じ傾向が見られた。3年間共に「二次性徴」「生・死等」のカテゴリーを選択する傾向があった。しかし、児童は2004年度は「二次性徴」、2005年度は「性以外」、2006年度は「二次性徴」「性以外」というように、違う傾向が見られた。子どもたちの興味関心は毎年同じではないということを示唆しているのではないだろうか。

カフェテリア方式性教育の条件を踏まえ、S小学校では性教育の目的の一つに「教師のメッセージ」を重視している。本研究では、この「教師のメッセージ」は担当者としてテーマ設定の段階で含め、担任として子どもたち一人ひとりに学ばせたいテーマを決める時に繋げ、自分のテーマの授業を受けた子どもたちへ伝える、というように重層的に扱った。これも個別化を促したと思われる。担当者は「子どもたちに伝えたいことは?」と問われた時点で、子どもたちとの「関係性」を問われているのではないだろうか。その子どもに育てたい能力、その子どもの夢や希望、その子どもの課題等、把握した上で、「子どもたちに伝えたいことは?」と問われているのではないだろうか。実際に、S小学校では、2005年度・2006年度の実践から教師の指導意図を明確にした主体的な関わりがみられ、2007年度には教師が子どもたちの緊急及び今日的課題の対応に即した実践が見られた。そして、2008年には、クラス全

体及び個々の児童の課題や担任教師としてのメッセージ（願いや希望）をアンケート等で明確にしなが実践を進めた。このように経年的に個別化が定着し、2008年度には性教育の個別化を明確に意識した実践が行われたという報告であった。

S小学校のカフェテリア方式性教育実践の評価を、子どもたちのアンケート、子どもたちのふりかえり、事例でみていく。

2008年度1回目の授業実施後のアンケート結果では「今日の内容は、よくわかりましたか?」という質問の回答は、「よくわかった」と「だいたいわかった」を合わせると85.8%であった。知識理解は概ねできたと思われる。また、「今日の内容は、心にのこりましたか?」という質問の回答は、「のこった」が67.9%であった。子どもたちにとって印象深い授業であったことが推測される。子どもたちの心にのこる性教育とは?

子どもたちのふりかえりから、子どもたちが学んだことをKJ法で分析した結果は先に記述した通りだが、さらに以下のように統合された。

子どもたちは、親の願いや思い、有限な生や『いつか来る死』に思いを馳せ、将来への夢や希望を持ち自らの行動を考えた。これはカフェテリア方式性教育が子どもたちの【抽象性を育てる】活動の一つになったことがうかがえる。

さらに、このような抽象的な営みを前にして（ベースにして）、人が生まれる仕組みや、二次性徴が始まる仕組みを学び、自分の『気になるからだ』を確かめるとい【身体性へのまなざしを持つ】ことで具体的な実感を得たと思われる。

そして、自他の関係性に気づき、自他を大切にし、性の慎みや配慮、温かい関わりを考えると【関係性を大切に】することを通して、『ひとりでは生きられない』ことを学んだと思われる。

事例からは、子どもたちの変容が報告され、「児童生徒の人格の完成と豊かな人間形成」を究極の目的とした性教育の実践に繋がる可能性が示唆された。

S小学校においてカフェテリア方式性教育を2004年度～2008年度の5年間実践した。様々な切り口から検討した結果、カフェテリア方式性教育がS小学校の性教育の目的達成のために有効であることが推測された。

## 6. 引用・参考文献

- 1) 「学校における性教育の考え方、進め方」平成11年3月31日発行 文部省
- 2) 松浦賢長・江寄和子『性教育に関する集団指導と個別指導の中間的指導「カフェテリア方式」の開発』第51回日本学校保健学会抄録集2004年11月
- 3) 江寄和子・松浦賢長「カフェテリア方式による性教育における児童の準備性に関する研究」第24回日本思春期学会抄録集2005年8月
- 4) 江寄和子・松浦賢長「小学校におけるカフェテリア方式による性教育の展開に関する研究」第25回日本思春期学会抄録集2006年8月



- 5) 江崙和子・松浦賢長「カフェテリア方式性教育のテーマ設定・テーマ選択に関する研究」第65回日本公衆衛生学会抄録集2006年10月
- 6) 江崙和子・松浦賢長「カフェテリア方式による性教育におけるレンガ式評価モデルの試み」第53回日本学校保健学会抄録集2006年11月
- 7) 江崙和子・松浦賢長「小学校におけるカフェテリア方式性教育3年間の実践に関する研究」第26回日本思春期学会抄録集2007年8月
- 8) 江崙和子・松浦賢長「カフェテリア方式性教育におけるレンガ式評価モデルの試行に関する研究」第54回日本学校保健学会 2007年9月
- 9) 江崙和子・松浦賢長「カフェテリア方式性教育の3年間の実践におけるテーマ設定・テーマ選択に関する研究」第66回公衆衛生学会抄録集2007年10月
- 10) 江崙和子「小学校におけるカフェテリア方式性教育のシステム構築に関する研究」第15回養護教諭教育学会抄録集2007年11月
- 11) 江崙和子・浅田裕美子「カフェテリア方式性教育4年目の展開に関する研究」第55回近畿学校保健学会抄録集2008年6月
- 12) 江崙和子「カフェテリア方式性教育の実践の評価に関する研究」第16回日本養護教諭教育学会抄録集2008年10月
- 13) 江崙和子・浅田裕美子「カフェテリア方式性教育5年目の展開に関する研究」第56回近畿学校保健学会2009年6月
- 14) 江崙和子・松浦賢長『カフェテリア方式による新しい時代の性教育「子どもと健康 No. 81」労働教育センター』2005年6月P58-75
- 15) 江崙和子・松浦賢長「カフェテリア方式による性教育の実践～エビデンスに基づいた新しい性教育の導入～」『健康教室 東山書房2005年8月
- 16) 江崙和子・松浦賢長「性教育で学びたいテーマを選ぶ～カフェテリア方式による性教育の実践①～」『健康な子ども』日本生活医学研究所 2005年10月
- 17) 江崙和子・松浦賢長「新しい時代には新しい性教育を②」『心とからだの健康』健学社 2005年10月
- 18) 江崙和子・松浦賢長『「あなたを大切に思っている」というメッセージをもっと伝えていきたい～カフェテリア方式による性教育の実践②～」『健康な子ども』日本生活医学研究所2005年11月
- 19) 江崙和子・松浦賢長「新しい時代には新しい性教育を③」『心とからだの健康』健学社 2005年11月
- 20) 江崙和子・松浦賢長「2回目の授業は、保護者が学ばせたいテーマを選んで～カフェテリア方式による性教育の実践③～」『健康な子ども』日本生活医学研究所2005年12月
- 21) 江崙和子・松浦賢長「新しい時代には新しい性教育を④」『心とからだの健康』健学社

2005年12月

- 22) 江寄和子・松浦賢長「カフェテリア方式による性教育2年目の実践～子どもたち一人一人を大切にしたい性教育～」 「健康教室」東山書房2006年7月
- 23) 江寄和子・浅田裕美子「カフェテリア方式による性教育3年目の実践～レンガ式評価表から見えてきたもの～」 「健康教室」東山書房2008年2月

### ⑧謝辞

カフェテリア方式性教育を導入し、実践して下さったK市立S小学校の教職員の皆様、2004年度～2006年度にカフェテリア方式性教育の開発者としてご指導いただきました、福岡県立大学の松浦賢長先生に心から感謝申し上げます。

**Practical research on sexuality education for individuals and small-groups  
– Through the five years' implementation of Cafeteria-style  
Sexuality Education in elementary school –**

Kazuko EZAKI

Department of Childhood Care and Education

Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, Fukuoka, 807-8586, Japan

**Abstract**

Cafeteria-style Sexuality Education, developed in 2004, is a form of sexuality education based on individual and small-group instruction (Matsuura, 2004).

This research was conducted with the aim of exploring the potential of Cafeteria-style Sexuality Education.

Cafeteria-style Sexuality Education has been designed to fulfill the following conditions. Research methods, Cafeteria-style Sexuality Education was implemented in elementary school S located within the city of K, for a 5-year period starting from 2004.

Results, The research was conducted on children from grades 4 to 6 in 2004, and children in grades 5 and 6 from 2005 to 2008. The number of children (male and female) involved in the research is as follows—29 children in 2004, 21 children in 2005, 18 children in 2006, 23 children in 2007, and 28 children in 2008. The number of lessons conducted is as follows—2 lessons in 2004, 3 lessons from 2005 to 2007, and 2 lessons in 2008. The main actors involved in selecting the themes are as follows—children and parents/guardians in 2004, children, parents/guardians, and teachers from 2005 to 2007, and children and teachers in 2008. The number of themes is as follows—an average of 7 themes per session in 2004, an average of 6 themes per session in 2005, an average of 7.3 themes per session in 2006, an average of 10.7 themes per session in 2007, and an average of 11 themes per session in 2008.

The following observations were recorded with regard to the educational content (themes). From 2004 to 2006, the themes could generally be divided into the following 5 categories—“life and death,” “parents,” “secondary sexual characteristics,” “non-sexual themes,” and “elementary school and junior high school interconnections.” For 2007, the themes could generally be divided into the following 7 categories—“secondary

sexual characteristics,” “understanding of others and communication,” “self-understanding and self-esteem,” “information on sex,” “sexual victimization,” “non-sexual themes,” and “elementary school and junior high school interconnections.” For 2008, the themes could generally be divided into the following 10 categories— “secondary sexual characteristics,” “male-female relationships,” “sexual victimization,” “information on sex,” “self-understanding and communication,” “self-understanding and self-esteem,” “understanding of others and communication,” “lifestyle habits,” “future prospects,” and “elementary school and junior high school interconnections.”

Teachers’ messages, Over time, the involvement of teachers as main actors with clearly defined instructional aims was observed in the 2nd and 3rd year of implementation; in the 4th year, teachers were observed to be tailoring lessons to respond to the urgent and current issues facing the children.

In the 5th year, lessons were conducted alongside clarification of the children’s issues (individual and the entire class) and messages (requests and preferences) from the supervising teachers, through surveys and other methods.

Children’s review sheets and the examples, among other results, suggested that Cafeteria-style Sexuality Education was effective in fulfilling the aims of sexuality education for elementary school S.

**Keywords:** sexuality education, cafeteria-style, teachers’ messages